松原市アドバンスト・インターンシップ（AIM）について

～「主体的、対話的で深い学び」があるリアルな就業体験を通した人材育成～

はじめに

大阪府松原市教育委員会では、令和4年4月から大学生を対象とした新しいコンセプトのインターンシップ（松原市アドバンスト・インターンシップ（以下「AIM」））に取り組んでいる。これまでの一般的なインターンシップの形としては、個々の学生が実習受入れ先職員の指導の下で、与えられた仕事（課題）をこなしていくというイメージを抱く方が多いと思われるが、AIM では、複数の学生でチームを組み、自分自身のこれまでの学校生活・社会生活や様々なニュースなどを通じて感じている課題意識を基に、教育に関する研究テーマをチームとして設定するとともに、調査・分析・議論を重ね、最終的にはその課題の解決に向けた政策提案を行うというものである。

本稿では、AIM 立ち上げに至るまでの背景、ねらい、取組状況、今後の改善点等について報告したい。

1. AIM立ち上げに至るまでの背景

現在、教育行政関係者が抱えている大きな課題として、「教員の養成、採用、研修」がある。

特に養成、採用の部分に関しては、教師のなり手不足、教員採用試験倍率の低下、採用後間もない教員のメンタル不調、講師確保の困難さなど、自治体を問わず全国共通の悩みだと言えよう。近年は、コロナ禍の影響や、教職員の過酷な労働環境などがクローズアップされていることに伴い、その傾向に拍車がかかっている状況にある。とりわけ、講師確保の困難さについては深刻さを増しており、人事担当者が講師候補者100人以上に連絡をしても、1人も面接にすら来てもらえないということが頻発している。

そこで、松原市教育委員会では、「国や大阪府教育委員会の動向をただ見ているだけではなく、『松原市教育委員会として何が出来るのか、何をすべきなのか』、『松原市で教員になりたいという人を増やすためにはどうすればいいのか』ということについて事務局内全体で議論し、行動すべき」という考えの下、以下のような取組を進めることとした。

（1）松原市近隣の教員養成系3大学への出前講義

新型コロナウイルスの蔓延に加え、GIGA スクール構想の導入により、この数年間で小・中学校の教室内の風景は劇的に変化した。将来、教員を目指している学生が激変した教育現場の状況について理解すること、大学卒業までにどのような力を身に付けたり準備をしたりすべきなのかを考えることが重要である。しかし、大学で教鞭をとっている先生方自身が、コロナ禍や一人一台端末環境の下での学級経営や授業を経験していない場合がほとんどであろうことを考慮すると、市教育委員会の立場から学生たちに最新の情報をタイムリーに発信することが求められるのではないかと考えた。

松原市立の小学校は15校、中学校は7校あり、令和3年度における児童生徒数は約 7,800 名、教員数は約 600 名となっていたが、この約 600 名の教員の出身大学を調べたところ、全体の 4 割を超える者が松原市近隣の教員養成課程のある3大学（大阪教育大学、大阪大谷大学、四天王寺大学）の出身者であることが判明した。

このことから、当該3大学に対して、コロナ禍や GIGA スクール構想に松原市がどのように対応しているのか、これから教員を目指す学生には何が求められるのかということ等を伝えるため、松原市教育長による特別講義をさせてほしいとお願いし、令和3年11月以降、順次実施

させていただいた。

講義後にそれぞれの大学の学生からの振り返りレポートには、「GIGA スクール構想という言葉は知っていたが、実際の授業風景がこれほど変化していることに驚いた」、「自治体間、学校間で取組に大きな差があることがわかった」、「自分自身の今後のキャリアについて改めて考えるきっかけになった」という趣旨のものが多数見られた。

(2)「マクロ」的な視点を養うための取組

教員を目指す学生は必ず教育実習を経験するが、そこでは児童生徒との関わり方や、授業の組み立て方・進め方などが中心となるものであり、経済学になぞらえるならば「ミクロ」の視点であると言える。これに対して、「なぜこの学習活動が必要なのか」、「学級・学校の在り方をどのようにしていけばいいのか」というのは「マクロ」の視点であると言える。この数年間で社会や学校現場は劇的に変化したが、それらに適切に対応していくためには、教員自身が「ミクロ」と「マクロ」の視点を併せ持つようにしなければならない。また、このことは教員を目指す者だけにあてはまるものではなく、民間企業や公務員などを目指す者にとっても同様であろう。その「マクロ」的な視点を養うための何らかの取組が出来ないだろうかというのが AIM の出発点である。

2. AIMの制度設計・ねらい

ここからは AIM のことを中心に述べていきたい。教員養成系大学への出前講義と並行して、前述の「マクロ」的な視点を養うための取組として、教職や行政職を目指す学生を対象とした教育委員会事務局におけるインターンシップを考えた。その際、個人で参加する従来型のインターンシップでは、短期間（2～4週間程度）のうちに経験できることには自ずと限界があること、また、実際に働く場面では個人で完結する業務は少なく、分業やチームプレイで成立するものがほとんどであるということに着目し、これまでにはないコンセプトのインターンシップを目指すこととした。

(1) 制度設計

新しいインターンシップでは、①3～5人程度で1つのチームを編成し、チームのメンバーは一定期間で交代しながら実習を行う、②実習期間中に取り組む課題や研究テーマは自分たちで考えて設定し、最終的にはその課題を解決するための政策提案を行う、③実習の時期・期間・日時は学生チームが決める、④事務局職員は基本的に学生のお世話はしない、という手法を検討した。①の一定期間で交代することとした理由は、学生にチーム内での作業分担を促したり、自分が得た情報や経験を他者に引継いだり共有したりするというプロセスを作るためである。このことは、一斉にたくさんの人数を事務局に受け入れてしまうと、対応する職員側のマンパワーや学生が座る席の確保に問題が生じる恐れがあったことについての解消にもつながった。③の実施時期等に自由度を持たせたのは、②で記載した最終的な政策提案まで持っていくためには、夏季休業期間だけでは足りないであろうと予想したことに加え、大学の授業を疎かにしてはいけないと考えたためである。④については、あくまでも学生の自主性を重視するためであり、「とりあえず何らかの作業を与える」ようなことはせず、学生が質問や意見交換を求めてきた場合のみ対応するというスタイルを模索したものである。

(2) ねらい

前述のとおり、学生たちが取り組む研究テーマは自分たちで決めさせることとしたが、このことは、①応募者本人たちの知識・経験・問題意識などを踏まえて課題設定させることで、他人事ではなく自分事としてより現実味のある提案を引き出すこと、②チームのメンバー全員で考え議論することにより、物事を多面的・多角的に捉えること、③将来の進路として教職や行政職を目指す学生にとって、より実践的な体験になること、④学生が自己の適性や将来設計について見直す機会とするとともに、職業選択時のミスマッチを防ぐこと等につながるのではないかと考えた。これに加え、本取組について発信していくことで、多くの方々に松原市の教育に興味を持ってもらうとともに、小中学校等の教職員や教育委員会事務局職員に対しても、「学生がここまで出来るのだから、我々も頑張らなければ!」という意識改革につなげることを期待したものである。

また、新たなインターンシップは、学生たちに「漫然とインターンシップに取り組むのではなく、明確な目的意

（別紙資料）

松原市アドバンスト・インターンシップ（AIM）で目指すもの

現状の「職場体験」や「インターンシップ」は応募者側と受入れ側にとってwin-winなものになっているか？

応募者側　…・期待していた業務内容ではなかった　・単純作業ばかりで得るものが少なかった
受入れ側　…・面倒を見るのが大変だった　・何の作業をさせるか悩む

望ましい在り方

応募者側　…　自ら課題を見つけ、思考力、判断力、実行力を養うとともに、将来の生き方についても考える機会に

受入れ側　…　応募者への助言等を通じて、自らの業務の見直しや、指導力の育成につなげる

クリアすべき課題

応募者側　…　限られた期間で、課題を設定するために必要となる情報を収集できるか
設定した課題の妥当性についてどう判断するか
インターンシップ終了後に達成感を感じられるものにできるか

受入れ側　…　受け入れた際の負担感を少なくできるか
受け入れたことによるメリットを実感できるか

○そもそも、２～４週間程度の短期間に独りで経験できることには限界があるのではないか
○実際に働く場面では、個人で完結する業務は少なく、分業やチームプレイで成り立つものがほとんど

個人完結型からチーム型へ

○　3～5人程度で１つのチームを編成し、チームのメンバーが一定期間で交代しながら一人ずつインターンシップを行う。
○　多岐にわたる教育課題の中からグループとしての研究テーマを設定するとともに、その課題の解決や軽減に向けた政策を提言することを目指す。
（※実習期間（最大６カ月）や実習日時は、学生自身で決めさせる。また、チーム内で役割分担や情報の共有・引き継ぎを行う。）

期待される成果

○応募者本人の知識・経験・感想等を踏まえて課題設定することで、より現実味のある提案に
○チーム全体で考え、議論することで、物事を多面的・多角的にとらえ、テーマを深堀り
○将来の進路として教職や行政職を志す者にとって、より実践的な体験に
○学生が自己の適性や将来設計について見直す機会となり、職業選択時のミスマッチを防ぐ
○教育施策に関する若者の生の声を聞くとともに、有益な提案を現実の施策に反映させる
○本取組みの一連の流れや成果を紹介することで、小中学校等の教職員の意識改革に

識やねらいを持ってやり遂げてほしい」という願いを込めて、「松原市アドバンスト・インターンシップ（Advanced Internship in Matsubara city＝AIM：エイム）」と名付けることとした。
（※別紙資料「AIM で目指すもの」参照）

3. AIMの取組状況

前述の3大学に阪南大学（本部：松原市）を加えた4大学を対象として、令和4年4月に AIM の実施について募

集をかけたところ、阪南大学、大阪大谷大学、四天王寺大学の3大学から4チーム（計19名）と個人エントリー1名の応募があった。募集当初、受入チーム数は2～3の予定であったが、予想以上に反響が大きかったため、応募者全員を受け入れようということになった。若干の調整を行った結果、同じ大学・学科・学年のチーム、同じ大学でも学科や学年構成が違うチーム、複数大学の学生から成る混成チームというように、バラエティーに富んだ4つのチームを受け入れることとなった。令和4年6月下旬には、各チームを個別に集めてオリエンテーションを行い、大学が夏季休業に入る8月上旬から円滑にインターンシップを開始できるよう、諸々の留意点等について説明した。

（1）AIM への参加方法等

AIM に参加する学生は、原則として実習予定日の1週間前までにスケジュール管理アプリに参加日時を登録してもらうこととした。また、参加に際しては学業を最優先することとし、講義のない日や空き時間を上手にマネジメントし、実習期間を通じて6～8回程度参加することを求めた。また、各チームにはそれぞれの所属大学から指導教官を登録していただき、必要に応じて学生へのアドバイスをお願いした。

（2）研究テーマについて

AIM への参加申し込みの時点で各チームは研究テーマ案をそれぞれ設定しており、実習開始後は、その研究テーマ案に関連した参考資料や情報を集めたり、松原市の学校教育の現状等について事務局職員との意見交換を行ったりした。各チームの当初のテーマ案は、「ICT 活用について」が2件、「特別支援教育について」、「保護者との関係性をよくするために」というものであったが、どのチームもこれらの大括りなテーマをいかに焦点化し具体性をもたせるかという点で苦戦していた。このため、事務局職員及び大学の指導教官立会いの下、各チームの課題意識や所属大学の教育資源・特徴などを活かせるようなグループワークを行い、研究テーマにより具体性を持たせたり、研究テーマそのものを見直したりすることとなった。

グループワーク実施前は少なからず行き詰まり感を抱えていた学生たちも、グループワーク実施後は見通しをもって実習を進めることができていたように見受けられた。

（3）成果発表会の開催

実習開始から約半年が過ぎた令和5年2月25日に、松原市内にある阪南大学の会場をお借りして成果発表会を開催したところ、オンライン視聴を含め約 150 名以上の方々が学生たちの政策提案に耳を傾けていただいた。発表会当日の模様は紙面の都合上割愛するが、別記QRコードから視聴することができるので、ぜひご覧いただきたい。

成果発表会に参加した学生からは、「自分たちでテーマを決めて解決策提案に取り組んでいくのは、実際に働き出したときに役立つと思った。」、「チームでそれぞれの役割を担いながら取り組んでいく際に、メンバーとのコミュニケーションの大切さを実感した。」、「今回、多くのつながりを感じ、私自身が教育に携わる者になりたいという意欲をさらに高めることが出来た。」と振り返る声もあった。なお、各チームのテーマは以下のとおりである。

●阪南大学チーム

松原市民をターゲットにALTを活用した異文化交流
～小・中学生編：英語を使ってオリジナルゲームを開発しよう!～

●大阪大谷大学チーム

一人ひとりの子どもの特性に応じた教師自作のオリジナル教材・教具のシェア
～教師間ネットワークの活性化～

●四天王寺大学チーム

ホンマの自分みつか～る
～様々な自己分析ツールの提案～

●四天王寺大学・阪南大学混成チーム

中学生のコミュニケーションを活性化させるためのICTツールの提案
～もっと知って、もっと話そう～

4. 今後の改善点等

成果発表会を終えた1か月後に、事務局職員と大学関係者で令和4年度（第一期）の振り返りと、令和5年度（第二期）に向けての改善点について打ち合わせを行った。

（1）令和4年度（第一期）の反省点

第一期の反省点として、① AIM のコンセプトを学生たちに正しく理解させられていなかったのではないか、②

チーム内での情報共有や研究の方向性を固めていく上でのコミュニケーションが不十分だったのではないか、③チームの指導教官が各メンバーへのアドバイスや研究の進捗状況のチェックなどにもっと関わってもらうべきだったのではないか、④混成チームの編成・指導に関して配慮が足りなかったのではないか、ということが挙げられた。

（2）令和5年度（第二期）に向けての改善点

第一期の反省点を踏まえ、第二期に向けての改善点として、①募集時の PR 文書等で、AIM のコンセプトがもっと伝わりやすいものにする、②学生が実習に参加した日の実習内容をテキストでチームメンバー及び指導教官に共有させるとともに、チーム内で月1～2回程度の作戦会議を義務付ける、③混成チームを編成する際は、課題意識や興味関心が一致している者だけで編成できるよう募集方法を工夫するとともに、混成チームの指導は教育委員会事務局が担うものとする、④学生がスケジュール感を持って実習に取り組めるよう、可能な限り早い段階で「研究テーマ確定」、「中間報告会」、「成果発表会」の日程を明示する、ということが挙げられた。

おわりに

AIM を企画する際に最もこだわったのは「リアルさ」である。最近は、民間企業などでも「課題解決型」のインターンシップを打ち出しているところが増えてきているが、そのほとんどは企業側から学生に対して所定の課題を与え、その解決に向けた提案をしてもらうものである。しかし、実際の社会では、目に見えている「課題」そのものよりも構造的な問題の方が大きかったり、対処すべき課題自体が何なのかということがわからなかったり、見つけられなかったりする場合が多いのではないかと思われる。

また、実際の職場では、「世代の違う人たち」、「これまでのキャリアが違う人たち」、「物事の考え方や捉え方が違う人たち」、「仕事に対する熱量が違う人たち」と一緒にチームとして働かなければならないことが多く、「何をどう分担するのか」、「意見が食い違ったときにどう折り合いをつけるのか」など、様々な違いを持つ人同士が同じ目標に向かって進むことの難しさは改めて述べるまでもない。AIM にチャレンジした学生たちは、口をそろえて「壁にぶつかった」と言っていたが、それはまさに「リアルさ」ゆえだと思われる。そして、彼らが社会に出た際には、否応なくその「リアル」に直面することになるであろう。

学習指導要領では「主体的、対話的で深い学び」の重要性が説かれているが、AIM にはその全ての要素が入っていると考える。AIM を通じて主体的、対話的で深い学びを実体験した学生が、学ぶことの大切さや楽しさ、何かが出来た（分かった）ときの充実感や達成感などを子どもたちに伝えていけるような教師、社会の変化や要請に応えていけるような社会人になってくれることを願っている。

●令和4年度（第一期）AIMホームページURL

https://www.city.matsubara.lg.jp/soshiki/kyouiku_seisaku/1_1/4/1/matsubara_aim/aim_r4/18900.html

●令和4年度成果発表会動画URL

https://reg34.smp.ne.jp/regist/is?SMPFORM=qbsj-manaqg-2363e1b2adc0cfd742624e66064468a8